道　徳　科

道徳科部　横尾　紗也香　　樋口　　晃　　内田　圭祐
研究協力者　山崎　雄介

Ⅰ　道徳科における「教科本質的な学び」について

自らの道徳的価値観を基にし，他者の道徳的価値観に触れながら，よりよく生きる基盤となる道徳性を育んでいく学び

道徳科の本質的な意義の中核をなす見方・考え方は「様々な事象を，道徳的価値理解を基に自己との関わりで多面的・多角的に捉え，自己の生き方について考えること」である。この見方・考え方を踏まえ，道徳科の本質的な学びを「自らの道徳的価値観を基にし，他者の道徳的価値観に触れながら，よりよく生きる基盤となる道徳性を育んでいく学び」とした。

本校では，「共によりよい生活を創造する子ども」の育成を目指している。「共によりよい生活を創造する子ども」を育成するためには，道徳科の本質的な学びが欠かせない。なぜなら，道徳科の本質的な学びを繰り返す中で，多くの他者の道徳的価値観に触れ，一人一人の考え方の違いを見付け，他者の考えのよさに気付きながら，道徳的価値理解，人間理解，他者理解を深めていくことができるからである。また，その中で，物事を多面的・多角的に考え，自己の生き方についての考えを深めながら，自分なりのよりよい生活を見いだす道徳性を育んでいくことにもなる。これらのことから，「共によりよい生活を創造する子ども」を育成することにつながっていく。

２　研究の方向

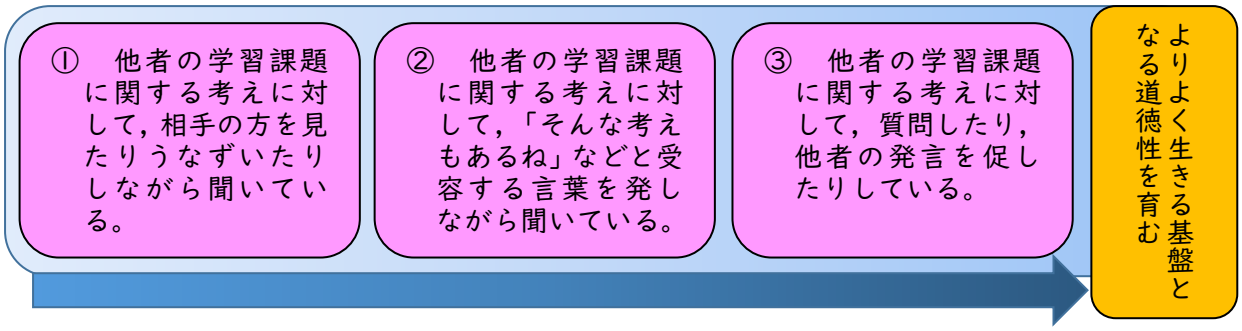
本校，道徳科部で捉えた道徳科の本質的な学びは，「自らの道徳的価値観を基にし，他者の道徳的価値観に触れながら，よりよく生きる基盤となる道徳性を育んでいく学び」である。この教科本質的な学びの中で，他者と協働して問題解決的な学習を行うことは，他者の多様な道徳的価値観に触れ，それらについて話し合う中で，自らの道徳的価値観を広げたり深めたりしながら，よりよく生きる基盤となる道徳性を育むという意味をもつ。

したがって，道徳科の学びの中で，非認知能力である「他者と協働する力」は，自らの道徳的価値観を基にし，他者の道徳的価値観に触れながら，よりよく生きる基盤となる道徳性を育むことに向かって発揮される。

ここで，道徳科の教科特性に着目すると，子どもたちが，自らの道徳的価値観を基にしたり，読み物教材の登場人物に自我関与したりして，よりよい自己の生き方に関する考えをもち，それを表出する姿がよい学びをする姿としてあげられる。しかし，道徳科は，「自己の生き方についての考えを深める」学習であるため，「自分の生き方は，自分のことだから，自分の考えはそのままでよい」などと捉え，他者の考えを聞くことに必要感をもたないことがあると考えられる。そのため，子どもたちが，「友達の考えにはよさがある」といった思いを高めることが必要になる。そこで，子どもたちが，教科本質的な学びの中で，「友達の考えにはよさがある」という思いを高める学びを実現し，「他者と協働する力」を発揮する姿がさらに現れるように，研究を進めていくこととした。

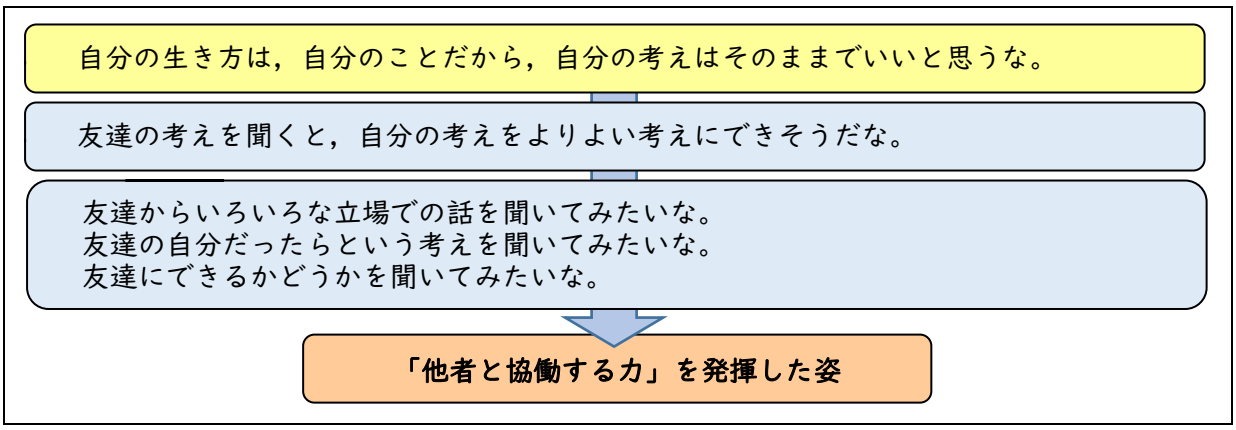
3　研究内容

（１）「他者と協働する力」が発揮された姿



道徳科における「他者と協働する力」が発揮された姿は，子どもたちが学習課題に関する自己の考えをもち，小集団で話し合ったり，全体で話し合ったりする際に発揮される姿であると考えた。学習課題に関する考えとは，学習課題の解決に直接向かうものだけでなく，教材や話合いの中で，子どもたちが感じたことや，気になったことなども含む。道徳科における「他者と協働する力」は，他者の考えにはよさがあるという思いから発揮されると考えた。①の姿は，他者の考えを聞く際に，相手の方を見たりうなずいたりすることで，他者の考えによさを感じていることが分かる。②の姿は，①の姿よりも他者の考えによさを感じ，言葉を発することで，そのよさが伝わっていることを相手に伝えている姿と考え，「他者と協働する力」の発揮が強いと捉えた。③の姿は，子どもたちの「相手の考えを詳しく聞きたい」という思いの高まりから発揮される姿と考えた。この姿は，他者の考えのよさをさらに強く感じている姿であるとともに，よりよく生きる基盤となる道徳性を育むことにより近付く姿であると捉え，「他者と協働する力」がさらに強く発揮された姿であると考えた。

（２）学びのプロセス

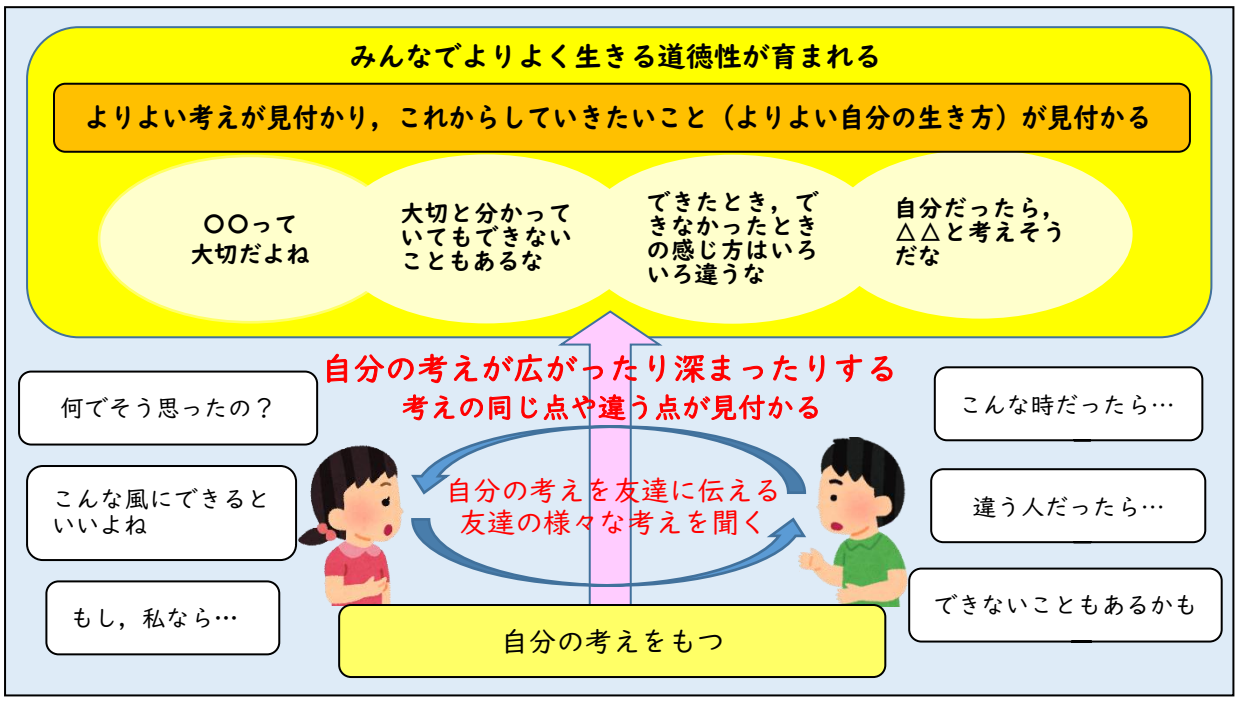


（３）学びのデザイン

①教科本質的な学び

道徳科の教科本質的な学びを基に，道徳科を学ぶよさを年度始めと各学期始めに共有する。**（図１）**道徳科を学ぶよさを子どもたちと共有した中で，道徳科を学ぶ意義を，「よりよい考えが見付かり，これからしていきたいことが見付かる」と捉えた。また，道徳科における学びにおいて，学習課題に関する自己の考えをもち，話し合う際に，「もし，私なら…」，「こんな時だったら…」などの視点をもって話し合うことを主な学習方略として捉えた。そして，道徳科における協働的に学習する意味を，他者の多様な道徳的価値観に触れ，学習課題について話し合う中で，自らの道徳的価値観を広げたり深めたりしながら，よりよく生きる基盤となる道徳性を育んでいくこととして位置付けた。これらのよ

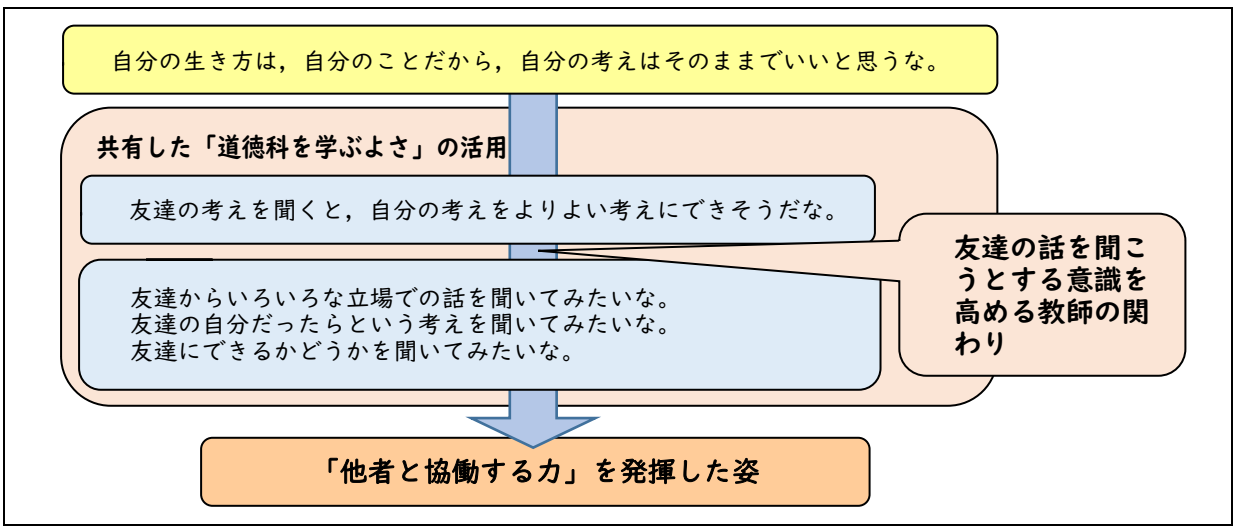
うに，道徳科を学ぶよさの共有により，子どもたちは道徳科を学ぶ意義や協働することのよさを感じながら，学びを積み上げていく。実際に道徳科を学ぶよさを共有した際には，子どもたちから，「友達の考えを聞くと，もやもやしていた考えがすっきりして考えをはっきりさせられる」，「同じ考えでも理由が違って，新たな発見がある」などの反応があった。このように，子どもたち自身が，他者の考えによさを感じていたことを，明確にしたり自覚したりすることにつながり，協働的に学習する意味も見いだしていった。



＜図１　道徳科を学ぶよさ＞

②プロセスを基にした学びのデザイン

年度始めや各学期始めに学ぶよさを子どもたちと共有して授業を行うことで，道徳科を学ぶ意義や，協働することのよさを感じた上で本時に取り組むことができる。そして，本時の【導入】では，共有した「道徳科を学ぶよさ」の活用，【展開】では，友達の話を聞こうとする意識を高める教師の関わりを行う。このようなデザインをすることで，子どもたちは，協働することのよさをさらに感じながら，自らの道徳的価値観を基にして他者の道徳的価値観に触れ，よりよく生きる基盤となる道徳性を育んでいくこととなり，道徳科の本質に迫っていく。これらのデザインは，全てが関係し合い，繰り返し行っていくことで，道徳科を学ぶ意義や協働的に学習する意味に迫るものである。



共有した「道徳科を学ぶよさ」の活用

道徳科において,「友達の考えにはよさがある」という意識を高めるために，共有した「道徳科を学ぶよさ」を生活経験の想起，教材の範読，自己の考えをもつ時間をとった後に提示し，展開で友達の考えを聞いたり，自己の考えを伝えたりして，よりよい自己の生き方を見いだそうとする意識へつなげられるようにする。この共有した「道徳科を学ぶよさ」の活用に関しては，年度始めや各学期始めに行った「道徳科を学ぶよさ」の共有を基に，道徳科を学ぶ意義や協働することのよさなどを，子どもたちが意識し続けられるように，発達段階に応じて，共有した「道徳科を学ぶよさ」の活用を授業に組み込む間隔を工夫する。例えば，子どもたちが学習に取り組む様子に合わせて，低学年であれば隔週，中学年であれば月に１回，高学年であれば隔月で行う。

また,前時での子どもたちの話合いの姿を基に,「道徳科を学ぶよさ」の図にある,「道徳的価値理解」,「人間理解」,「他者理解」,「自分事として」という考えにつながる視点をもって話し合っていた姿への価値付けを毎時間行っていく。以下の具体例は，低学年を想定したものであるため，教師からの提示が多くなっているが，発達段階に応じて，教師が,「自分の生き方をよりよいものにするために，他にどのような視点で話し合うとよいか」といった問いかけを行い,話し合う際の視点を,子どもたちが表出し,話し合っていけるように，共有した「道徳科を学ぶよさ」の活用を繰り返し行っていく。

【共有した「道徳科を学ぶよさ」の活用　具体例】

《間隔を空けて行う活用》

Ｔ：これから，学習課題について話し合うよね。どうして話し合うのかな。
Ａ：友達の考えも聞かないと，自分の考えだけになって，考えをよくできないから。
Ｂ：自分の考えと友達の考えとを比べてみると，新しい考えが見付かることもあるよ。
Ｃ：同じ考えでも，理由が違うことがあるから，友達の考えを聞くと，なんとなくの考えだったのが，はっきりするよ。
Ｔ：そうだね。「何でそう思ったの」って理由を聞いたり,「違う人だったら」って，いろいろな立場で考えたり,「自分だったら」って自分事にして考えてみたりして，友達と話し合えるといいんだったよね。
Ｄ：うん。そんな話合いをすると，これからの自分の生き方をよく考えられた。
Ｔ：そうだね。それに,「自分はできないかも」って，人間の弱さと向き合うこともとても大切なことだったね。

《毎時間行う活用》

Ｔ：この前の授業で,「違う人だったら」って，立場を変えて話し合えたことや，それを「自分だったら」って，自分事にして話し合えたのって，とてもよい話合いだったね。他にも話し合う際に大切にできるとよい視点は，どんなものがあったかな。
Ａ：「できないこともあるかも」って，弱い部分にもふれて話し合えるといいよね。
Ｔ：そうだね。人には弱さもあるもんね。今日も友達の考えを参考にしながら，自分の生き方をよりよくする考えをもてそうだね。

友達の話を聞こうとする意識を高める教師の関わり

子どもたちが友達の考えによさを感じ,「友達からいろいろな立場での話を聞いてみたい」,「友達の自分だったらという考えを聞いてみたい」,「友達にできるかどうかを聞いてみたい」といった意識を高めるために,「友達の話を聞こうとする意識を高める教師の関わり」を行う。この関わりは，子どもたちの考えに対して，教師が問いかけや価値付けをするものである。子どもたちの話合いが停滞しているときや，話そうとしているもののうまく表出ができていない様子があるときには，主に問いかけを行う。子どもたちの話合いに進展が見られるときや，自分たちで視点を変えながら多面的・多角的に話し合えているときには，主に価値付けを行う。

問いかけは，子どもたちの考えに対して，その理由や自己の生き方とのつながりなどを問いかけたり，子どもたちが自分たちで見付けた道徳的価値に対して，新たな視点を提示したりするものである。この問いかけにより，子どもたちの話合いが，より進展するようにしていく。

価値付けは，子どもたちが，自分たちで友達の考えに対してその理由を問いかけたり，自己の生き方に関する話や，新たな視点での話をしていたりした際に，その問いかけや話し合っている視点を価値付けていく。この価値付けは，子どもたちが，「理由についてもっと話してみよう」，「自分だったらという視点で話してみよう」など，話し合う視点を明確にして，話合いがさらに進展するようにしていくものであり，本研究で捉えたプロセスとは間接的に関わるものである。

これらの関わりは，子どもたちが考えを多面的・多角的に視点を変えながら話合いを進められるようにすることを意識して行うものである。

【友達の話を聞こうとする意識を高める教師の関わり　具体例】

	子どもが話していること	教師の関わり
問いかけ	一つの立場での話に終始している	登場人物を取り上げて 〇〇さんはどう感じていたのかな？ △△の人たちはどんな思いだったのかな？
	一つの場面での話に終始している	□□なときだったら，どうかな？
	教材の話に終始している	自分だったらどうかな？
	よさばかり話している	自分だったらできそうかな？
価値付け	道徳的価値理解が深まった話ができている	そんなよさがあることに気付けたんだね。
	複数の立場で話せている	〇〇さんだけじゃなく，△△さんの気持ちも考えられていていいね。
	教材と自己を結び付けて話せている	自分の生活と関連付けて考えられていていいね。
	人間理解につながる話ができている	確かに，できないとか，するのが難しいとか，そんな風に思うこともあるね。
	話し合いの内容全般に対して	深くうなずく，感嘆していることを笑顔やつらそうな表情などで表し，受容する態度をとる

具体例　４年　「五百人からもらった命」（生命の尊さ）

学習課題
　どうして，関わりのない人の命を救うために，様々な人たちが協力したのだろう

【問いかけ】
Ａ：命を助けようとすることが大切なことだからだよ。
Ｂ：そうだよね。絶対に大切なことだよ。
Ｔ：自分が同じような状況だったら，どう思うかな。
Ｂ：う～ん。大切だとは思うけど。自分だったらテレビやラジオでの放送を見たり聞いたりしただけでは，何もやらなそうだな。
Ｃ：確かに。ちょっと身近には感じなさそう。でも，命を助けようとすることに大切さがあって，何とかできるように自分なりにできそうなことを考えられるといいと思う。どうかな。

【価値付け】
Ｄ：テレビの人たちや，それを見ていた人は，何とか患者さんを助けたいって気持ちがあったんだね。
Ｔ：いろいろな立場の人の気持ちを考えられていていいね。
Ｅ：いろいろな立場で考えると，お医者さんや看護師さんも患者さんを助けたいって思っているよね。
Ｆ：うん。たくさんの人たちの助けたいって思いがつながっている感じがする。Ｄさんが言ってたのって，同じ感じのことかな。

４　成果と課題

本校道徳科における問題解決的な学習の中で，「共によりよい生活を創造する子ども」の育成に向けて，「他者と協働する力」を発揮する学びのデザインについて研究を進めてきた。その結果，次のような成果と課題が明らかになった。

〇成果

共有した「道徳科を学ぶよさ」の活用によって，子どもたち自身が感じていたことを基に「友達の考えを聞くと自分の考えをよりよい考えにできそうだな」という意識をもつことができた。そのため，子どもたちが「他者と協働する力」の発揮につながる，友達の話を聞きたいという意識をもつことにつながった。また，話し合う視点を自分たちで活用することにもつながった。そして，友達の話を聞こうとする意識を高める教師の関わりによって，話し合う視点が明確になり，子どもたちの話合いが焦点化され，話合いの中で立場を変えたり，自分事にしたり，人間の弱さに向き合ったりすることを，より促すことができた。これらが大きな要因となり，「友達の考えにはよさがある」という意識をもつことができ，「他者と協働する力」の発揮につながったと考えられる。

〇課題

子どもたちが，友達の考えに対して質問をする際に，ただ聞きたいという意識だけで質問をしたり発話を促したりすることがあった。友達の考えにはよさがあるという意識のもと，質問をしたり発話を促したりできるようにすることが大切である。また，「友達の話を聞こうとする意識を高める教師の関わり」は，子どもたちが話し合っていた視点や内容，話の流れを教師が把握できていないと，子どもたちの話合いを途切れさせてしまうことがある。教師と子どもたちが一緒に話し合うという意識をもち，子どもたちの考えをじっくりと傾聴しながら関わる必要がある。

【参考文献】

佐藤隆之・上坂保仁（2023）『市民を育てる道徳教育』勁草書房.

浅見哲也（2021）『道徳科授業構想グランドデザイン』明治図書.